

「大学生心理学」という知の体系化に向けて(3)

—大学生心理学の認識論的布置—

○山田剛史

奥田雄一郎

(京都大学高等教育研究開発推進センター)(中央大学大学院文学研究科)

Key words: 大学生心理学・大学生固有の文脈・対話的構築

【問題意識】

本発表は、筆者らが志向する「大学生心理学」という知の体系化に関する継続報告(山田・奥田, 2005a, 2005b; 奥田・山田, 2005)である。大学生心理学とは、“大学生自身の視点”と“大学生固有の文脈”を機軸として、“他領域との対話”と“現場への還元”を理念とした青年・発達心理学の一分化体系である。山田・奥田(2005a, 2005b)では、大学生心理学の射程と独自性、密接領域である青年心理学との異同について検討を行った。大学生心理学を構築するにあたり、脱文脈的傾向の強い「青年心理学」や対象者が大学生であるというだけの「大学生の心理学」、実態調査的傾向の強い「大学生研究」との差異化を図りつつ、その位置づけや積極的意義を明示化していく必要がある。

【議論の整理】

山田・奥田(2005a)では、フロアの方から様々な意見が得られた。筆者らはこれらの意見を回収し、吟味し、回答していくことを通じて、独我論的な閉鎖性ではなく、大学生心理学の対話的な開放性に基づき体系化を図ることを目指す。山田・奥田(2005a)には、高校の教師や大学でFDに関わっている教員、社会学や文化比較を専門とする研究者など他領域の方が積極的に参加して下さり、有益なコメントが得られた。異領域との対話による体系化(対話的構築)を目指すという開放性の基盤が得られた。それらの意見をまとめたものが以下の Table である。こうした意見を参考にしながら、優先課題を見極め、順に明示化していく必要がある。

Table 発表に対するフィードバック結果の分類*

1. 大学, 大学生の範囲
・4大のみか短大や専門学校などを含むのか? 年齢層の範囲は?
・大学(生)が多様化する中で, 大学(生)自体の存在・意味とは?
2. 隣接学問, 先行知見との接点
・新しい視点と伝統的文献学の知見との接点
・社会学, 社会心理学, 発達臨床心理学との接点
3. 方法論的多様性・選択
・学生を巻き込んだフィールド研究
・量的研究と質的研究のバランス・相補性
4. その他
・大学生以外の人たちの存在も含めた中で捉える
・“内在的視点”を大学生心理学で強調する理由づけ

*この結果は、主に RT 時に配布した感想をもとにしている。

【目的】

本報告では、上記で得られた諸課題のうち、「1. 大学, 大学生の範囲」と「2. 隣接学問, 先行知見との接点」とを取り上げる。また、大学生心理学の中核概念である「大学生固有の文脈」と「内在的視点」に関しても議論を深めていく必要がある。そこで、本報告(3)では特に「大学生固有の文脈」ということについて、(4)では「内在的視点」ということについて論じることを目的とする。

【文脈という大学生心理学の認識論的戦略】

筆者らは、大学生心理学の中核概念として“大学生固有の文脈”を据えた。文脈とは、ともに重視している内在的視点とも密接に関連する概念だが、端的に言えば、大学生を取りまくあらゆる環境を示し、自己を含むあらゆる現象・概念を支える根幹を成すものである。また、大学生固有というのは、大学生であるが故に持ち得るという意味を指す。“あらゆる環境”と曖昧な表現を用いているが、次のようなレベルを想定している(cf. 山田, 2005)。それは第一に、歴史・社会的文脈といったマクロレベル、第二に、学校環境といったメゾレベル、第三に、個別具体的な対象・経験といったミクロレベルからなる文脈の「階層構造的性」である。また、所与のものとして存在する<客>としての文脈、対象との関係を結びつけることで生成される<主>としての文脈といった文脈の「主客力動性」も想定されている。こうした認識に基づき、それらを積極的に研究デザインに組み込んだ検討を行うことが、大学生心理学の重要なテーゼとなる。

【大学生心理学の対象射程範囲】

大学生心理学では、“大学生”という研究対象者の範囲をどのように想定するのか、これは単純に「内・外」といった決定論的な話ではないし、今後修正・拡張することもあり得る。その上で、最優先すべきは4年制大学であり、次いで短期大学である。現時点で、専門学校やその他の特殊教育機関は含んでいない。また、近年増加している社会人学生は、排除するのでも含めて考えるのでもなく、個別に検討していく必要がある。これらの理由として、先述したように、大学生心理学が過度の一般化を避け、大学生固有の文脈を重視するといったことに帰因する。例えば、国公立、地方・都市圏といった大学形態の違いや、学年や時期といった個別・特殊性も考慮していかねばならない。同時に、歴史・社会的な大学生の変遷過程をも考究し、現代大学生の現代性も浮き彫りにしていかなければならない。そうしたデータの絶えざる収集・蓄積・統合によって存立するのである。

【大学生心理学の存在様式】

大学生心理学は、独自のリサーチと異領域間の対話に基づく、大学生の心理に特化した専門領域として位置づけられる。あくまでも「排除の論理・対立の図式」ではなく、「学融・共同構築の論理」を強調する。その意味では、例えば青年心理学として位置づけられてきた従来の研究の中にも、大学生心理学として位置づけられる研究も少なくない。また、データから得られた知見と伝統的文献学や先行知見とを照らし合わせていくことも重要な営みである。特に、青年心理学における大学生心理学的研究、社会学における若者論、高等教育における教育という観点から見た大学生・大学生論などとの積極的な相対化が今後の課題である。

(YAMADA Tsuyoshi; OKUDA Yuichiro)